

仮名手本忠臣蔵と近世後期小説

諏訪春雄

寛延元年（一七四八）に成立した浄瑠璃の「仮名手本忠臣蔵」はそれ以前に上演されていた義士劇を集成した決定作であった。ひとたびこの作が生れると以後の義士劇は多かれ少なかれこの作の影響下に生れてくる。また、「仮名手本忠臣蔵」自体もすぐ歌舞伎にはいつて両方で上演をくりかえしている。ある調査によると、寛延元年から幕末までの百二十年間で「仮名手本忠臣蔵」は浄瑠璃として七十回、歌舞伎として二百八十回、計三百十回、書替え、その他の義士劇は浄瑠璃として十七種四十六回、歌舞伎として四十八種百六十五回、以上すべてを合計して五百六十一回の上演を数えている（土田衛『仮名手本忠臣蔵』以後の義士劇）国文学解釈と鑑賞昭42・12）。曾我狂言などと並んで、日本の演劇が生んだ最高の人気芝居といえよう。しかも、明治以降、曾我狂言が急速に人気を失ったのに対し、「仮名手本忠臣蔵」は江戸時代に優るとも劣らない人気を維持していることは周知のとおりである。

「仮名手本忠臣蔵」は歌舞伎や浄瑠璃として舞台上で上演されただけではなく、小説の題材としても好んで利用された。黄表紙、合巻、読本、洒落本、滑稽本など、多様な形式が江戸時代後期の小説として登場してくるが、「仮名手本忠臣蔵」は、その異なる形式の小説の中にもはいりこんで、書替えられ、趣向を施されて読者に提供された。

この稿では、江戸後期の多様な小説形式にはいりこんだ「仮名手本

忠臣蔵」について調べてみたい。その調査は以下のようないくつかの知見を我々に与えてくれるはずである。

第一に、「仮名手本忠臣蔵」という共通の素材を基盤にして歌舞伎や操り浄瑠璃の演劇と小説を比較することによって、演劇と小説のそれぞれの本質・方法の違いを明らかにすることができるであろう。

第二に、後期江戸の多様化した小説形式のそれぞれの本質・方法の違いを究明する資料とすることができよう。

第三に、小説の入組んだ趣向を解きほぐすことによって、「仮名手本忠臣蔵」に集成されて盛込まれた日本人の民族的特質が江戸時代人にとのように受けとめられたか、つまり、知性的にはかなり上位のクラスに属する江戸時代後期の小説作者と読者の、義士譚の受取り方を明らかにすることができよう。

さしあたり以上のような目的を設定して、以下、具体的にいわゆる「忠臣蔵もの」の近世小説を眺めていくこととする。

## 二

上田秋成の『雨月物語』（安永五年）や『春雨物語』（文化五年）に代表される前期の上方読本に対し、天明以後の江戸で刊行された読本を普通に江戸読本の名で呼ぶ。読本は中国の稗史小説（歴史小説）に手本を借りた、当時としては高度な知的文学である。時代を過去に設定した歴史小説、あるいは超現実的な怪異小説の形式を取るものが多く、作者の世界観や人生観が色濃く盛り込まれている。

振鷲亭(?)文化一二)の『いろは醉故伝』(寛政六)などを先駆的な作品として、滝沢馬琴と山東京伝が相次いで発表した『高尾船字文』(寛政八年)と『忠臣水滸伝』(前編五冊、寛政十一年刊、後編五冊、享和元年刊)によって、江戸読本の性格は決定され、馬琴と京伝は読本界の両雄として君臨することになる。

京伝の『忠臣水滸伝』は中国の『水滸伝』を「仮名手本忠臣蔵」の世界に移し変えた作品であり、その翻案ぶりは京伝の奇才を示してあますところが無い。江戸小説における「忠臣蔵もの」の代表としてまずこの作の検討からはじめよう。

## 前編

北朝の北明帝の御時、洛中に怪異がしきりにおこり、また北陸に疫病が流行した。宮中では都の神社に命じて祈禱を行わせ、また、大臣源具親の奏聞を容れて、特に新田義貞の兜を鎌倉の地に埋めて追善することになった。足利將軍尊氏の弟管領直義はただちに鎌倉に下り、執事高武蔵介師直、雲州の刺史塩治廷尉高貞に命じ、極楽寺切通しの地に兜を埋めさせることとした。二人がその地に穴を掘ると土中より盤石があらわれた。師直はこれを黄金の類の隠し場所かと推定して欲心をおこし、高貞の止めるのも聞かずに掘り進むと、一条の白気が昇り、四十余条の金光が四方に飛んだ。

この怪異に恐れをなした師直は一日鶴岡の社に参詣した折、塩

治の奥方貌好夫人に遇ってこれを恋慕した。和歌の師兼好に恋文の代筆を頼んで貌好に贈ったが、貌好がなびく気配を見せないの計略を用いて塩治をおとしいれ、性来短気の塩治は刃傷におよんで自害して果てた。貌好は家臣原郷右衛門に伴われて若君とともに本国雲州におもむく途中、師直方の伏兵鷲坂内手の者に捕われようとしたが、桃井若狭助に救われた。さらに、天竜川で賊に襲われ、若君もろとも水中に投げこまれたが郷右衛門及び塩治家の飛脚寺岡平右衛門に助けられた。平右衛門は会得した神行の法で貌好らを本国に伴った。雲州の留守居大星由良は軍略にたけた人物であった。彼は貌好を高貞の弟石堂縫殿助の居城に送り、鉄九太夫父子らの不忠の徒を除いて義を重んじる家臣と党を結んだ。

城を追われた鉄九太夫の一子貞九郎は山賊の頭領となり、鈴鹿山中で桃井若狭助の臣加古川本蔵の一行を襲い、本蔵が主君の命で鎌倉から京の足利尊氏へ届ける贈り物を奪い取った。

師直の奸計にかかって主君高貞憤死の原因をつくった速野勘平は主家滅亡後、妻偲児の実家に身を寄せていた。偲児の継母夜叉老婆は偲児を邪魔にして偲児をあざむいて遊女に売り払い、夫与一兵衛を毒殺したが、みずからも誤って情夫である獺師の狸角兵衛に撃たれて死んだ。勘平は塩治の臣千崎弥五郎と出遇って大星の義拳に加わる伝手を得た。

後編

京で大星は日夜揚屋の一季達に通つて遊興にふけていた。師直の間者となつた九太夫はその大星の真意を探らうと驚坂伴内とともに遊廊にはいりこんでいた。この地で名妓とうたわれていた、漂亮は大星の子力弥がもたらした貌好からの密書を奪い取り、わざと大星の手にかかつて死に、夫勘平の罪をわびた。床下で様子をうかがっていた九太夫は大星によつて刺殺された。

加古川本蔵の妻戸難瀬は娘の小波を伴つて大星の隠れ家を訪れ、かねて婚約のある力弥と小波の結婚をせまるが、大星の妻阿石が応対に出てすげなく断つた。戸難瀬母娘がその場で自害しようとしたとき、虚無僧姿の本蔵があらわれ、鉄貞九郎の首を示し、無実の罪を得た事情を語ると、大星夫妻も主君の仇討ちの企てを打明け、両家心解けて祝言の式を挙げた。

塩治の家臣山背助宗村は事情あつて塩治の家を去り、泉州で天川屋義平と改名し、商船問屋を営んでいた。塩治高貞の弟石堂縫殿助の許に忍んでいた貌好と若君が人質として鎌倉に引立てられようとしたとき、義平は自分の妻と子を身代りに殺して、貌好母子を救つた。一夜、石山寺に義士を集めた大星は仇討ちの機会到来として鎌倉に下つた。草庵にある吉田の兼好は、夢に、神女の九天玄女から、天帝が多くの星を下界に下して大星以下の義臣に生れ変らせ、奸臣や佞者らを罰させ、天に代つて道を行かせたが、天數尽きて、すでに彼らの天上に帰るべきときがきたことを告げ

られ、大星らの復讐の成就を悟つた。夢から覚めた兼好は、果して、大星らが高師直を討取つたことを巷の噂で知る。

この作品は、「仮名手本忠臣蔵」の他に、前述したように中国の長編小説『水滸伝』をも参照している。本来、読本と呼ばれる伝奇小説は、中国小説の翻案からはじまったものであり、江戸読本の性格と内容を決定した『高尾船字文』と『忠臣水滸伝』は、共に、『水滸伝』に拠つて、中国小説の翻案の仕方の一つの手本を示した作品であつた。

『忠臣水滸伝』がどのように『水滸伝』を翻案しているか、その実際についての詳細な研究はすでに麻生磯次氏によつてなされている（『江戸文学と支那文学』昭21・5、再刊、『江戸文学と中国文学』、昭30・2）。登場人物名は「仮名手本忠臣蔵」に拠つており、時代背景も『太平記』に借りている。従つて、『忠臣水滸伝』は世界を「仮名手本忠臣蔵」から採り、『水滸伝』はそこへ趣向としてちりばめられたことになる。

ここでは「仮名手本忠臣蔵」がどのように利用されているかを中心にみていこう。

巻之一で追善のために新田義貞の兜を鎌倉の地に埋める筋は、「忠臣蔵」の大序兜改めに拠っている。「忠臣蔵」では義貞の兜の鑑定人として、以前兵庫司に女官として仕え、兜を見馴れている顔世御前が召し出されることになっている筋を氏家中務丞重国の役どころとして

いる。彼は義貞討死の戦場に居合わせて義貞の首を泥中から拾いあげた人物である。この場面で顔世（忠臣水滸伝では貌好）を登場させなかったために、『忠臣水滸伝』では次に鶴岡社前における師直の貌好見染めの場面を設けた。師直が兼好に貌好あての艶書の代筆を頼む筋は「忠臣蔵」にもみられるが、さかのぼればすでに『太平記』その他に記載のある著名な出来事である。

塩治高貞が師直に刃傷に及ぶ筋は「忠臣蔵」第三段切の館騒動に基づいているが、師直が山名次郎右衛門の計を容れて、塩治の臣速野勘平をつかつて塩治をおとしいれる筋をかまえている。この筋は『水滸伝』の方からきている。しかし、塩治の刃傷騒動に勘平に一役買わせているのは「忠臣蔵」で館騒動の際に勘平が腰元のおかると忍び逢っていて主君の大事に遅れ、のちのちおかる勘平の悲劇の直接因となっていることの影響であろう。

加古川本蔵が主君桃井若狭助の命令で鎌倉から京の足利尊氏へ贈り物を届ける件は、「忠臣蔵」で本蔵が師直へ進物を贈る筋に基づいている。鈴鹿山でその尊氏の贈り物を山賊に奪われた本蔵がいったんは自害しかけて思い返し、生き延びて賊を捕えようと考え、かたわらの松の枝を只一刀に斬りおとして決意のほどを示す筋は、「忠臣蔵」第二段桃井館の場面で師直を討とうとはやる主人の機先を制して庭の松の枝を伐る件の利用である。

『忠臣水滸伝』卷之五に展開する勘平、漂児、与一兵衛、その後妻夜叉老婆などをめぐる筋は、「忠臣蔵」五段目、六段目と『水滸伝』

をたくみにないませている。与一兵衛の後妻夜叉老婆は愚直な夫の眼を盗んで獵師の狸角兵衛と密通している。その先妻の娘漂児を邪魔にして、その夫勘平の偽手紙をつくり、あざむいて遊女に売りとばし、夫与一兵衛を砒素で毒殺する。この辺の筋が『水滸伝』に拠っていることについては麻生氏の前掲書に詳細に説かれている。『忠臣水滸伝』はそうした『水滸伝』に基づく筋をかまえながらも、角兵衛が暗夜に野猪を撃とうとして誤って夜叉老婆を殺すこと、その角兵衛を勘平が討ちとって、舅と姑の仇を討つ筋を設けてたくみに「忠臣蔵」の趣向を生かしている。ここで、勘平が千崎弥五郎に出会い、大星への推挙を頼む筋も「忠臣蔵」の五段目、六段目に拠っている。夜叉老婆の情夫狸角兵衛の名も、六段目の勘平切腹の場と与市兵衛の死骸をかついで登場する土地の狩人の名に借りている。

『忠臣水滸伝』後編卷之一に展開する大星の揚屋での遊興と漂児の死に至る筋は、「忠臣蔵」第七段の祇園一力茶屋の場に拠っている。『水滸伝』の宋江をめぐる筋を一部取り入れているが、比重は「忠臣蔵」に傾いている。ただ、漂児が夫勘平の罪を大星にわびるため、わざと密書を奪い取って大星の手にかかって死ぬ筋は『水滸伝』を取り入れている。その他は、力弥が貌好からの密書を持参する件、由良が亡君の命日であるにもかかわらず、九太夫の面前で蛸着を食う件、九太夫が由良の錆刀を試す件、九太夫の駕籠抜けの計略、さらに、最後の三人侍の登場に至るまで、『忠臣水滸伝』は細部にわたって「忠臣蔵」の筋を取り入れている。

『忠臣水滸伝』後編卷之三は「忠臣蔵」第九段切山科の場に拠っている。この個所は、『水滸伝』に利用すべき適当な趣向がなかつたためか、大体は「忠臣蔵」に拠っている。最後に、本蔵が庭の雪仏を見て、師直の滅亡の近いことを告げ、力弥が槍を取ってその雪仏を突くと、中から、本蔵の和歌の師兼好法師の好意による師直館の図面があらわれる筋は、「忠臣蔵」で、由良之助が力弥の手にかかつて死ぬ本蔵へのはなむけとして庭の雪でつくった二体の石塔を見せて敵討ちの覚悟を明かす条、本蔵が掣引出物として師直邸の見取り図を贈る条をあわせて書き替え、「忠臣蔵」には登場しない兼好の活躍場を設けたものである。

このあと、『忠臣水滸伝』は天川屋義平の独擅場となるが、その筋立ては主として『水滸伝』に拠って、要所々々に「忠臣蔵」をはじめこんでいる。貌好と若君を隠した唐櫃を守って泉州へ急ぐ途中、土兵に襲われた天川屋義平が、身をもって唐櫃を守って吐く「天川屋義平といふ好漢なり」という啖呵が「忠臣蔵」十段目の天河屋の場の「天河屋の義平は男でござる」に基づくことはいうまでもない。

このようにみえてみると、『忠臣水滸伝』は大筋は「仮名手本忠臣蔵」に拠って、その第一段から第十一段まで、即ち、師直の顔世への横恋慕から判官刃傷、大星ら同志の苦心、仇討ちまでをたどりながら、随所に『水滸伝』の筋を翻案してはめこんだものであることがわかる。場面によっては『水滸伝』の筋を主として、「仮名手本忠臣蔵」の筋

を解体してしまつた個所もみられるが、大筋は「忠臣蔵」の方が重んじられている。しかし、各場面の趣向ということになると、すでに世間周知となっている「忠臣蔵」よりも意外性と目新しさに富む『水滸伝』が多用されていることはいうまでもない。すでに、建部綾足が安永二年（一七七三）に刊行した『本朝水滸伝』以来、『水滸伝』の翻案は当時の小説界を風靡した風潮であつたのであるが、その一般への周知徹底の程度は、とうてい「忠臣蔵」に及ぶところではなかつた。京伝がその『水滸伝』の趣向を主とし、「忠臣蔵」を世界にとどめたのは賢明であつたといえよう。

しかし、京伝の「忠臣蔵」への態度は、「忠臣蔵」の精神にきわめて忠実であつた。「忠臣蔵」の是とする人物は是とし、「忠臣蔵」の非とする人物は非としている。大星らの仇討ち行為にこめられた武士道を讚美して、その顕賞につとめ、彼らの行動、心情にいささかの疑いもはさんでいない。その筋を翻案する場合でも、『水滸伝』の関係で止むなく行われる改訂に止めて、可能なかぎり、「忠臣蔵」の筋は生かそうとしている。『忠臣水滸伝』は「忠臣蔵」の翻案であつてもパロディとかもじりとみることはできない。パロディやもじりにみられる原典批判の精神はいささかもこの作に認められないからである。律義までに「忠臣蔵」に忠実な作であつた。それは、京伝という作家の特質というよりは、むしろ、読本という小説形式の教訓的特質が「忠臣蔵」の抱懐する精神に一致するものがあつたからであろう。「忠臣蔵」そのものの読本化はこの作一つに止まつて以後後続作を生まなかつた。

京伝作が一つの典型を打出したために、以後の後続作は「忠臣蔵」に変化、奇抜という読本の要求する条件を満たすものを得ることがむづかしかつたからであろう。

## 三

「仮名手本忠臣蔵」に取材した近世小説を大観してみると、「仮名手本忠臣蔵」の主題や精神を忠実に受継いだものと、原作をパロディ化して批判的に受継いだものとの二群に分けることができる。前節に触れた山東京伝の読本『忠臣水滸伝』は前者の忠実作の代表であり、この系統に含めることができるものとしては、他に、上方のいわゆる絵本読本の『絵本忠臣蔵』などを挙げることができる。

天明以降、読本の中心は江戸に移った。山東京伝、滝沢馬琴、十返舎一九、六樹園石川雅望、柳亭種彦らの作者が江戸でははなばなしい作家活動をつづけるが、それに反して上方は沈滞をきわめる。画家で作者を兼ねた速水春暁齋<sup>はやみづはる</sup>、岡田玉山<sup>おかだたま</sup>らが実録風の絵本読本や図会ものを発表、それにつづく栗杖亭鬼卵<sup>りつとうてい</sup>、暁鐘<sup>あけかね</sup>成<sup>なり</sup>などの作者は江戸読本の行方を真似しようとして成果をあげえなかった。

二編二十冊のうち、寛政十二年に前編十冊、文化五年に後編十冊の出した速水春暁齋画作の『絵本忠臣蔵』は後期上方の実録体読本の一例であるが、そのころ多く流布した写本の実録などを資料として義士銘々伝のかたちをとっており、作品として見るべき価値はあまりない

江戸の人情本作者が永春水が天保七年に初編を刊行した『正史文庫』十八編五十二冊は人情本の分野に属するが、内容は、『絵本忠臣蔵』と同じ行方をする実録体の義士物であった。十八編のうち、第四編までは初代春水の作であるが、第五編以降は二代が永春水の作であったといわれている。

この作の内容は義士銘々伝である。小山田庄左衛門、岡野三十郎、大鷲文吾、大星由良之助、寺岡平右衛門ら義士、または、その関係者を登場させ、講釈種をおもしろおかしく人情本風に和けている。

本書執筆の基本態度については、作者は、第二編の序文で、

忠臣義士の列伝を。当世様の長物がたり。人情本に写しかへて。

児女子によするせし会得青史実伝。孝女節婦を是に加え。いよくますます益義覚の為に。光をそゆる伊呂波文庫。狂言亭の反古なれど。例の艶語のの中本とは。事かはりたる忠勇節義。

と説明し、たまたま男女の情態を書きしるすことがあつても、楽しんでしかも姪することのない真実を表現し、各巻に教導勸懲の意をこめたのべている。

また、大星由良之助をはじめとする名の知られた義士の他に、それほど著名でない多くの人物を作品中に登場させたことについては、おなじ四十七士の中にも幸不幸があつて、ひろく美名の知られた者もあれば、事跡はもとより名前さえもよく知られていないものがある。これらも名声をむさぼろうとする者ではないが、同じように忠死をとげ

ながら美名のむなしく埋もれることが残念なので、一人々々の伝記、その妻子一族の身の上までももらさずつづろうとしたと説明している。

以上のような作者の意図のもつともよくあらわれている一編として、初編の小山田庄左衛門の話を取りあげてみよう。

小山田庄左衛門の父重兵衛は老齢の自分に代つてみごと義士の仲間入りをして主君の仇を報じてくれたものと信じていた我が子庄左衛門が、実は、同志の妻子へ配る分配金と寺へ納める亡君の遺品を請けとつてそのまま出奔したと知つて、不名誉を恥じ自害する。

話は小山田庄左衛門の上にさかのぼる。大星から諸士へ配当する三百両の金子を請けとり、大仏吉町<sup>おきよ</sup>まで来た庄左衛門は、そこでかつて自分と許婚の關係にあつた娘とよく似た容貌の女を見染め、うかうかとその跡をつけて、以前の同僚玉井弁右衛門がいまは女郎屋を開業している家にいたり、酒肴のもてなしをうける。庄左衛門がつけてきた娘はこの弁右衛門抱えのお安という芸者であつた。庄左衛門はこのお安と結ばれ、同志から脱落することになる。

史実の小山田庄左衛門は延宝五年に十兵衛の子として生まれ、馬廻り役となつて百五十石を領していた。主君内匠頭が幕府から死を賜つたのちは、大石らの同志として復仇の盟約を結んでいた。元禄十四年の冬、仇討ち決行の日が確定したとき、大石良雄は庄左衛門に大金を渡して同志たちの債務をつぐなわせようとしたが、庄左衛門はその金

を持って行方をくらました。

父十兵衛は江戸にあつて庄左衛門が主君の仇を報じる同志に加わつていたものと信じていたが、十五年十二月十五日にいたり、我が子の変節を知り、慚愧して自刃をとげた。

庄左衛門はそののち、中島隆積と変名して深川万年町に医者となつていたが、患者からの謝礼を横領した件で下僕の直助を責め、その怨みを買つて、享保六年正月十五日に直助のために妻とともに殺された。ときに年四十五歳。

以上のような経歴の人物小山田庄左衛門を小説中にとり入れて、春水はこの長編人情本『いろは文庫』の巻頭にすえた。著名な人物よりむしろ無名の人物に、功を立ててその名を後世に残した人物よりも事情あつて途中で挫折した人物に焦点を当てようとする作者の意図がよくあらわれている。また、庄左衛門がお安と結ばれる径路は男女の会話を巧みに写しだして、さながら、春水の得意とする人情本の色模様である。序文中に勸懲のためと断つていても、作者の意図が、読者の喜ぶ男女の痴態描写に力点を注いでいたことは疑問がない。

「仮名手本忠臣蔵」の世界をそのまま忠実に受けつぎ、批判やパロディの手法を用いない読本や人情本の系列で新味を出そうとすれば大石以下の同志の正伝の他に、その周辺に群つた傍筋の人物の描写に筆を向けていかねばならない。『いろは文庫』でも、この小山田庄左衛門の他に、森胡平太、高田軍兵衛、大星清左衛門ら、多数の傍役を登

場させ、作品に変化を添えている。

## 四

江戸の中期から後期まで出版された絵入りの小説に草双紙くさそうしと呼ばれるものがある。赤本、黒本、青本、黄表紙、合巻の五種を総称している。黄表紙までは表紙の色彩による名称であり、合巻は数巻を合冊した製本形態による名称である。

赤本から青本に及ぶ三種は婦女子を主要な読者対象とし、民話や童話の類、歌舞伎・浄瑠璃の翻案などを主要な題材に取上げていたものが、黄表紙になると、挿絵・本文ともに写実的な技巧をこらしていちじるしく知性的な文学となる。

黄表紙は安永四年（一七七五）に刊行された恋川春町画作の『金々先生栄花夢』にはじまる。

江戸で金もうけしようとして田舎から出てきた金村屋金兵衛は、目黒不動尊の茶店で、栗餅のできあがるのを待つあいだに眠りこんでしまう。その夢の中で江戸の金持ちの養子となり、流行の衣裳を身につけて豪勢な生活を送る。

取巻きをつけて吉原、深川、品川と遊びまわるうちに次第に金に窮し、ついに養父に勘当され、江戸へ出てきたときの姿で追い出される。ここで夢が覚めた金兵衛は、栄華も覚めてみれば一炊の夢と悟って田舎へ帰る。

謡曲『邯鄲』を下敷きとした富川房信の青本『浮世栄花枕』（安永元年刊）などを参考としていたらしいが、洗練された挿絵と、「穿ち」やパロディの手法を駆使した文体は、従前の草双紙とは面目を一新した大人の文学としての黄表紙の誕生となった。

この黄表紙の分野で「仮名手本忠臣蔵」を扱った作品が、安永八年に刊行された朋誠堂喜三二作・恋川春町画の『案内手本忠臣蔵』である。その序文で、喜三二は塩谷判官を批判して次のようにいう。

塩谷判官が不通で世の中の案内あなを知らぬために高師直へ差し出す賄賂も少なく、そのためあのような大事をひきおこすことになつた。世の中の案内あなを知るのが通で、世人がみな通になれば鬪諍いせぎもなく世の中は太平なのだ。

つまり、ここでは「仮名手本忠臣蔵」で生一本の性格で善人とされる塩谷判官が野暮な不通人とされ、佞人であったはずの高師直は知知りの通人となる。こうした価値観の転倒やもじりが知的な滑稽味を伴って展開されていく。

城の角櫓で早野勘平とおかるが濡れ場を演じ、おかるのかんざしが落ちて師直の顔を傷つける。しかし、師直は瓦の落ちたせいだのととりなす。判官はいぶかしく思って、おらんだ鏡で写して見て真相を知り、大いに憤って勘平とおかるを追放する。若狭介が本蔵に命じて小浪の嫁入費用の百両を兩人に貸し与える。判官は薬師寺と石堂を集めてしっぽくを言いつけて拳酒を催す。

「忠臣蔵」の三段目と四段目が巧みに変形させられて趣向として配置

されている。第三段目の館騒動で師直の悪口を腹にすえかねた判官は抜討ちに師直の眉間に斬つける。その騒動の際に、勘平とおかるは逢引きしていて主人の大事に遅れてしまう。その「忠臣蔵」の筋をもじって、この黄表紙では、城の角櫓での勘平・おかるの濡れ場で、おかるのかんざしが落ちて師直の額を傷つけたことにする。その軽妙で意表をついた書き替えやもじりが『案内手本忠臣蔵』の生命といえよう。

額に傷をうけたにもかかわらず、師直は瓦の落ちたせいにしておかるを勘平をかばう。しかし、判官はおらんだ鏡まで持ち出して、傷の原因を詮索し、ついに真相を知って二人を勘当する。「忠臣蔵」ではこれ以上嫌な人間はないように造型されている師直を物分りのよい通人とし、清廉潔白、さっそうたる若大将塩谷判官を短気で思いやりのない人物とする。抜きがたい常識となっている通常の見方をこの作では容捨なくひっくり返してみせる。

若狭介は本蔵に命じて小浪の嫁入費用の百両をおかる・勘平の兩人に貸し与える。これでは金に困って身売りする「忠臣蔵」の五段目、六段目の悲劇は起こりようもないし、また、勘平切腹もありえない。四段目で石堂・葉師寺の検使を前に切腹するはずの塩谷判官は、こちらではしつぽく料理を命じて拳酒を催す。拳酒は拳を打ちながら飲む酒であるが、切腹を見届ける検視を利かせていることはいうまでもない。

右が三段目、四段目のもじりであるが、これに対応して七段目のもじりは次のように展開する。

吉原一力で、勘平・おかるの勘当を許させようと、師直は伴内に言いふくめ、塩谷の盃へ釣灯籠の油をこぼさせ、銚子の蓋に伴内の影をうつして、彼を勘当しようと怒る。判官は師直の心づかいに免じて勘平とおかるを許す。寺岡平右衛門が椽の下で聞いていて、兩人とともに喜ぶ。

徹底した役割・性格の混同である。原作の祇園一力は吉原一力となり、由良之介が密書を読むために用いた釣灯籠の明りは、伴内が塩谷の盃に釣灯籠の油をこぼす筋に利用される。おかるが延べ鏡に映して密書を読みとろうとする件は、銚子の蓋に伴内の影を映すこととなる。敵役の師直や伴内がここでは献身的に他人のためにつくす苦勞人となる。縁の下に忍んで秘密を探ろうとする斧九太夫の役所は寺岡平右衛門に替る。

世の人が皆通にならばいざこざもなく世の中が太平となるという発想は一見安易な考えであるが、喜三二はその発想に基づいて、「忠臣蔵」の世界を書替えてみせた。なるほど、「案内手本忠臣蔵」の世界はその作者の考えに従って太平楽な出来事が連続する。戯作者の無責任な思いつきといってしまうべき程度であるが、「忠臣蔵」の堅苦しさに対する一つの批判となっていることは事実である。

天明七年にはこの喜三二の『案内手本忠臣蔵』を模倣して『仮名手本不通人蔵』が出た。「忠臣蔵」の人物をすべて不通として喜三二作の逆を行っている。

喜三二と並んで「忠臣蔵もの」の黄表紙に傑作を残したのは山東京伝である。かれは天明八年に『真字手義士之筆力』をあらわし、九寸五分、かんざし、尺八、縞の財布などの小道具を役者にして芝居をかまえるという新しい趣向を案出して、新作を生む余地のない「忠臣蔵もの」に展開をみせたが、さらに、寛政六年には『忠臣蔵前世幕無』と『忠臣蔵即席料理』の二作を発表した。

このうち、『即席料理』は、「忠臣蔵」の各場面、各事件を料理に付会し、地口のおかしさで文章をつらねている。たとえば、第四段の判官切腹の場面は次のように書き替えられている。

師直を殿中で傷つけた判官は、その罰として、自腹を切つて痛事いたごとのしつぽくを命じられる。そこへ、山名と石堂が拳をしにくる。

家老の由良之介が料理の招伴をしようと駆けつけてくるが、うまい物は皆にたべられてしまったあとなので、判官はアアゆらの介おそかったと残念がる。

「しつぽく」が「切腹」、「拳」が「検視」、「アアゆらの介おそかった」という判官のせりふが、由良之介の駆けつけた場面で判官のいう「ヤレ由良之助待ちかねたはやい」のもじりであることはいままでもない。

『忠臣蔵前世幕無』は、三世の因果は現世過去未来連続していてその間に絶えることがなく、さながら幕無しの延べ続けの芝居のようであるという意味で名づけられた題である。この題意に従って、「忠臣蔵」の人物関係をすべて前世からの因果によるものとして、おもしろ

おかしくこじつけている。

足利直義公の前生を尋ねてみると、鶴岡辺の商人であつて、両替屋で人形屋を兼ね、五月のあがり甲かまど（飾り用のかぶと）なども商っていたが、生れつきの寝坊で、昼も一日居眠りばかりしていて、何を聞いてもただよしよしとばかりいつていた。海馬あしかという獣けものもよく寝るので、海馬がただよしと人もあだなをつけた。それで後の世に足利直義公と生れ変つた。

顔世御前の前生は婆様であつた。あがり甲かまどを買つてもどろろとしたとき、老人の事ゆえ、つい足を踏みはずして、ほとりの深い川へ落ちてしまったのを、塩谷の前生の鳶とびの者がさっそく助けあげ、濡れた着物をぬがせて、我が着物を着せかえてうちへ送りどけた。この善根が後の世に報いられて、かのお婆は美しい女になつて塩治の妻となつた。川へ落ちた因縁で深い関係となり、着物を借りた報いで、重きが上の小夜衣わがつまならぬつまなかさねそという歌を詠んで貞女を立てた。一河の流れも他生の縁とはこのことである。

大星由良之助の前生はすつぽんであつた。このすつぽん、勘平の前生の煮売屋で吸物となるはずであつたが、塩治の前生の鳶とびの者が親の命日に買って蓮池へ放し、危い命を助かつた。そのため、後の世にその恩に報い、塩治のために大きな忠義をつくした。

この種と見立てともじりが「忠臣蔵」の十一段にわたつてほどこされ、北尾重政のこれも趣向の限りをつくした挿絵とあいまって、きわめて

高度な知性的文学となっている。

## 五

江戸時代の後期にはいろいろな形式の小説が生みだされている。その種類の豊富さと多様さは、日本の全歴史を通じても第一位であろう。洒落本、読本、滑稽本、人情本、そして、赤本、黒本、青本、黄表紙、合巻などの草双紙類。文学的な価値からみて、かならずしも高級とばかりはいいがたいようなこれらの多様な小説形式が生みだされ、それなりの読者を獲得し、読まれたという事実は何を意味するのであろうか。

文字教育が進んで文盲率が減り、小説を享受する人々が増加したと、そういう人々が娯楽として小説を要求したこと、単に娯楽に止まらず、小説の提供する多様な情報を世渡りの実用知識として人々が求めたこと、出版産業が発達し、いろいろな小説を商品として提供する機構やルートが整備されたこと、職人芸的なしっかりとした技法を身につけた作者が多く輩出し、それぞれの意匠をこらして大衆に喜ばれる作品を生産したこと、などなど、いくつかの原因が重なって、前後に類をみない多様な小説群の誕生となったものであろう。

それにしても、たとえば、馬琴の『南総里見八犬伝』、春水の『春色梅児誉美』、一九の『東海道中膝栗毛』といった作品が、どの小説形式に属するかを正確に言いあてることができる人は、江戸文学についてのかんりの知識の持主ということができるとはあまいか。

一九の『東海道中膝栗毛』は滑稽本である。滑稽本は享和初年（一八〇一）から幕末まで行われた小説で、書の型から人情本とともに中本とも呼ばれた。中本とは、読本などの半紙本と洒落本などの小本との中間の本の意味で、美濃紙二つ切りを二つ折りにした大きさの本であった。

この享和以降の滑稽本の前史として宝暦ごろから刊行された談義本とも教訓的滑稽本とも呼ばれる一群の作品がある。通説では、宝暦二年（一七五三）の静観房好阿の『当世下手談義』にはじまる庶民教化を笑いに包んで行う作品群で、題名に「教訓」「談義」などの文字を持つのをつねとした。当時流行した辻談義、夜講釈の口調を文芸にとり入れて生れたものであった。

この談義本、さらには黄表紙、洒落本などの、笑いや諷刺を基調とした文学が寛政の改革によって作風をそれぞれ変化させ、笑いを失っていったとき、笑いを求める読者の要求にこたえて、後期の滑稽本が登場してくる。

後期の滑稽本の幕明けをはなばなくかざったのが享和二年（一八〇二）に初編の刊行された十返舎一九の『浮世道中膝栗毛』であった。この作品はのちに『東海道中膝栗毛』と改題された正編が終わると、『続膝栗毛』と題して、金毘羅参詣、宮島参詣、木曾街道、善光寺参詣、草津温泉道と、弥次郎兵衛、喜多八の旅はつづけられ、二十一年

間にわたって書きつらねられた。

この十返舎一九に『忠臣蔵岡目評判』という随筆がある。享和三年（一八〇三）に刊行された書で、「仮名手本忠臣蔵」の文句を評釈したまじめな作品である。

一九は若年のころに大坂で浄瑠璃作者としての経験を持ったといわれており、この書の序文でも、浄瑠璃作者の近松東南が「なには江のあしの仮寝に。七とせあまり漂泊して。予が近松の流に遊びし一風土有。今や東のみやこに居を安ふし。その生業なまはらとなすものは。年毎にものゝ戯あそれたるを限を。草さうしてふものに綴出して。其称なをおちこちに唱とな高うなしたる十返舎のうし」とのべている。そうした一九の体験が本書には充分生かされ、「仮名手本忠臣蔵」の構成、趣向、語句、演出などが多方面にわたって説きあかされている。その際に、一九自身の意見をのべることもあるが、近松東南や近松半二の名を出して説かせている例も多い。

### 一、二、例をあげよう。

「忠臣蔵」の五段目は山崎街道の場である。ここで裏切り武士斧九大夫のせがれ定九郎は山賊となつて、百姓与市兵衛が娘鞆勘平のために娘のお軽を祇園の一方に売つてつくった金を強奪して与市兵衛を殺害する。その場に来合わせた勘平は、猪を射つつもりで、定九郎を誤射して舅の仇を討ったが、勘平はその事実が気がつかなかった。

この場面がある人が非難して、ここで定九郎も鉄砲に射たれて死ぬ

ことを見物に知らせず、定九郎も猪とともに駆け廻るうち、鉄砲の音を合図に幕を引けば、見物の目には、鉄砲の主もわからず、また、定九郎が射たれたことも知られないため、六段目に観客の興味がつながつて効果があがるのではないかといった。

これに対し、近松東南が答えている。それは一理あるようだが作者のねらいには劣っている。その理由は、四段目からここまで、見物の気を引き立てることが全くない。また、六段目も田舎の世話場で、観客の気分を発散させるところがないので、この幕で定九郎の悪を充分に見せつけておいて、与市兵衛に同情のいくように書きあげておけば、定九郎の最期に見物は満足する。また、ここで、定九郎が勘平の鉄砲に当たったことを知らせておくので、六段目与市兵衛住家の段が重要な場面となる。

このように、東南に説かせたのち、六段目では一九自身が次のようにのべている。

この段では作者の骨折りが充分生きて、勘平の切腹は新しい趣向となつてゐる。すべて芝居狂言は、見物に善とみせて悪となり、悪と思わせて善となる。人形の腹の中はあえて見物に知らせず、終始、疑わせておいて、のちに善悪がはっきりするようにしくむのが普通である。ところが、この勘平はそうした通例とは異なつて、定九郎が与市兵衛を殺して金を奪いとり、すぐに勘平の鉄砲に当って死んだことは、見物によく知っているが、勘平は全く知らない。自分が舅与市兵衛を射つたと思ひ込んで切腹する。他の狂言は見物に知らせないことが多

いが、この「忠臣蔵」では見物に見せて人形には知らせない。この趣向が新しい。そのため、眼前に眞の敵を討取りながら、却って無実の罪をこうむって自殺する勘平の心を思いやって見物は感涙にむせぶ。従って、この六段目は四段目の塩冶の切腹とは異なっている。

のちに、千崎弥五郎が与市兵衛の傷は鉄砲傷ではないと見抜いて、いよいよ見物に無念の思いをさせる、その作意の働きがすぐれている。この幕ははじめにさしたる趣向もなく段切りもいたってさびしいが、自然、重要な場ということになって、ひとびとの賞讃も受けている。一九はここまでのべて、五段目に近松東南のいったことが、いま思ひあつたと結んでいる。

一九はこのように、「忠臣蔵」の初段から十一段まで、道行の八段目を除いて、評釈している。そのうち、最後の十一段目には、近松と竹田出雲との作劇法の相違について触れている部分がある。

近松のやり方は、一幕のうち、狂言の筋を順次に並べて、そのうちには、見物にあれを思いやらせ、これを疑わせ、段切前に、筋を急転させて見物の目を覚す。だから、はじめから中ごろまでは、見ていて倦きることもあるだろうが、結末はどうなるのかと落着いて期待を持つように書かれている。

この忠臣蔵は、竹田流なので、一日の骨とする場の九段目の狂言、おいし、となせの出合のところでは、ことばのしゃれや人形の入りをはげしくして、見物が倦きないように工夫をこらして

いる。

近松のやり方は、たとえば悪人の計略でも、初段では善と見せて、二段目または三段目で計略があらわれ、はじめて悪人とわかるような例が多い。竹田のやり方は、一幕のうちに、善となり悪となる。

由良之助が七段目で、はじめは放埒者と見せて、段切に九太夫を害して本心をあらわし、また九段目でもとの放埒の態となり、祇園の者が帰ると、また本心にもどる。大事を抱えた身なので、虚となり実となって、臨機応変のふるまいがあるのは当然である。ここがもし近松の作意なら、由良之助は七段目は放埒のままであり、九段目にいたって本心を明かすように書くであろう。近松竹田ともにその見識は優劣がなく、双方ともに一理がある。故にそれぞれ名譽の著作が世に流布しているのであるから共に信用すべきものである。

一人で全五段を書きあげた単独作時代の近松の作風と、数人の作者が各段の執筆を分担した合作時代の竹田の作風の特徴をみごとに指摘した文章といえよう。

一九と並ぶ滑稽本の代表作者は式亭三馬である。彼が文化六年（一八〇九）から刊行しはじめた『浮世風呂』、つづいて文化十年から刊行した『浮世床』は、当時の庶民の社交場である銭湯と髪結床に視点を据え、そこに登場するさまざまな人物を描写して、おのずからの笑い

と世相批評を生み、一九の『膝栗毛』シリーズと並ぶ滑稽本の代表作となつている。

三馬が文化九年（一八一二）に刊行した『忠臣蔵偏癡氣論』は、「忠臣蔵」に取材した滑稽本の好見本である。

田舎の堅親爺で俗称石部金吉という偏癡氣先生が「忠臣蔵」を觀て、歎じて曰く、世の中は盲万人、目明き一人、かの大星めはくそたわけ、鷺坂伴内は泥中の蓮ともいふべき忠臣なのに、世の人は誰一人としてそのことに気がついていないということで、ぼつり／＼とはじめた偏癡氣論という趣向で、以下の「忠臣蔵」人物論が展開する。

その論旨はすべて従前の定説をくつがえすもので、塩治判官、桃井若狭之助、大星由良之助、加古川本藏、戸無瀬、かほよ、星野勘平、おかる、大星力弥、天川屋義平らは、ことごとく批判、論難され、代つて、高武藏守師直、斧九太夫、鷺坂伴内、山名次郎左衛門、大田了竹らが賞讃される。このうち、山名次郎左衛門は原作の薬師寺次郎左衛門である。江戸では寛政二年八月市村座上演の際に、幕府役人に同名の者があつて抗議が出、以後改名されたものである。

以上のうち、敵役の斧定九郎だけが、追はぎとまでなりさがつた見下げはてた奴で、父九太夫の面汚しとののしられている。

正を負に、陽を陰にひっくり返してみせるところに滑稽本の一つのねらいがあるが、その論鋒は鷺を鳥といいくるめる体のこじつけで、新しい価値観を提出して、未知の地平を開くといつたものではなかつた。

た。その点は、三馬も充分に自覚しておればこそ書名に『偏癡氣論』と名づけたのであろう。

大星由良之助を論難する偏癡氣先生の論の運び方は次のようである。顔世に忠義を尽す心があるなら、このように敵討ちなどという不祥事がおきぬようにかねてからはからうべきであつた。身は家老の職分にあつて一國一城を由良之助が、これほどの大事のおこるまで安閑として国許に止まっていたのは何事か。これが第一の難である。

主人判官の短慮をよく知っているなら、なぜさつそく鎌倉へおもむき接待役を断らなかつたのか、主人がお受けした役を家老が断つた例は古今に多い。短慮というものも一つの大病である。大病の理由で役儀を辞退しても誰がこれを不埒といおうか。これが第二の難である。

力弥が一方へ持参した顔世の密書を人の多い揚屋の座敷で披見し、たちまちおかる、九太夫兩人に見つけられ、無念のあまり、おかるを身受けして殺そうとまでする不仁のふるまい。これまた自分の思慮が浅く、大事を思い立ちながら酒色にふけたためである。これが第三の難である。

手負いの九太夫に大事を明かすとは何事か。これは鴨川で水雑炊をくらわしてしまうつもりであるから、他へもれることもあるまいが、人の出入りの多い揚屋のなかで、他人の見聞をはばかりがたないのは不注意のいたりである。これが第四の難である。

こんなように、偏癡氣先生は十の難点をあげて由良之助を非難する。

揚げ足取りに類した屁理屈ながらそれなりの筋の通っているところがおもしろい。

これに対して、悪役を弁護する論の運びは多少苦しいところがある。たとえば斧九太夫である。

九太夫はよくものを未然に察する。先見の明ある人というべきである。第四段の扇が谷の塩治上屋敷の場面で、原郷右衛門が、顔世の生花に対して、花は開くものであるから御門も開き、閉門を許される吉事の御趣向といったのに対し、九太夫は、このたびの殿の落度は軽くて流罪、重くて切腹と予言した。果して判官は切腹した。また、我が子定九郎の平生の行儀をみて、将来を察して勘当している。果して定九郎は盗賊辻切りとなってついに人手にかかっている。先見の明がなかったなら、どうしてひとりの子を勘当したりしようか。ただ惜しいのは、国のわざわいを未然に察しなかったことである。

元禄の赤穂浪士の仇討ち事件は、いうまでもなく、ぬきさしならぬ社会的、時代的な条件のもとに発生したものである。寛延の「仮名手本忠臣蔵」は、世界を「太平記」にかりながらも、あたくかぎり赤穂浪士の仇討ち事件がおこるにいたった時代的、社会的背景を作品のなかにとりこもうとしていた。

三馬の弁代者たる偏癡先生の論はそうした「仮名手本忠臣蔵」成立の背景となっている社会的、時代的條件をとりはらった仮構世界に

おける遊戯的な人物評価である。滑稽本がそのしゃれたエスプリにもかかわらず、鋭い社会風刺の書となりえなかった理由であろう。

三馬は『忠臣蔵偏癡氣論』を刊行した翌年の文化十年に、同じく「仮名手本忠臣蔵」に取材した『仮名手本蔵意抄』を刊行している。

文化元年に刊行された万寿亭正二（狂言作者篠田金治の別号）の滑稽本『仮名手本穿鑿抄』を増補したものである。『蔵意抄』の書名は、忠臣蔵を劇場の衣裳蔵に見立てた蔵衣裳の洒落である。

高師直之艶書、枕自鳴鐘、足利館四足門之古瓦、千崎所持弓張提灯といった「仮名手本忠臣蔵」中に事実登場した、あるいは、登場したであろうと推測される種々の小道具類にもっともらしい考証を加えている。

たとえば、千崎所持弓張提灯については、実物らしきものを図示したのち、

其形傘のごとく作り、押ひろげて弓張提灯とす。是則千崎弥五郎が浪々の身の営みに製する所なり。はなはだ不細工に見ゆれど、これもむかしは弓張の用と便すと云々。○今案ずるに花浴の人これを劍先提灯と呼り。尤中古の頃までは流行したりしが絶て今はなし。かかれば千崎てうちんといふべかりしを劍先と誤伝へしなるべし。

とのべる。このしかめつららしい考証は、当時流行の考証随筆の類に模して、術学的な時代風潮を皮肉ったものであろう。

---

## *Kanadehon Chūshingura* and the Development of the Modern Novel

Suwa Haruo

The *jōruri* (浄瑠璃 ballad-drama) *Kanadehon Chūshingura* (仮名手本忠臣蔵), was first performed in 1748. It was a work comprised of and incorporating previously performed *kabuki* (歌舞伎) and *jōruri* based on the vengeance of the forty-seven *rōnin* (浪人 masterless samurai) of Akō (赤穂), a castle town in Harima (播磨) province, and influenced in turn, the development of *Akō rōshigeki* (赤穂浪士劇), or plays about the forty-seven *rōnin*. *Kanadehon Chūshingura* was adapted for both *kabuki* and *ningyō shibai* (人形芝居 puppet theater). It also proved to be a favorite subject for novels, and was recast in the various literary modes that emerged in the Edo period, such as *ukiyo-zoshi* (浮世草子 genre stories), *yomihon* (読本 readers), *sharebon* (洒落本 risqué stories), *gokan* (合巻 bound-together volumes), *kibyōshi* (黄表紙 “yellow-cover” picture booklets), *kokkeibon* (滑稽本 humorous stories), and *ninjōbon* (人情本 human-interest stories).

Representative examples of these various literary modes are examined in tracing the adaptive changes in *Kanadehon Chūshingura*. To summarize, the purposes of this article are to compare these modes, including *jōruri* and *kabuki*, for which *Kanadehon Chūshingura* was adapted, in order to elucidate the differences between the novelistic and dramatic renditions of this work; to distinguish the salient characteristics of the various literary modes which emerged in the latter half of the Edo period; and to show, by analyzing the complex plot of *Kanadehon Chūshingura*, how the national character of the Japanese people was popularly interpreted in the Edo period. A final objective is to clarify how the novelists of the time, who constituted an intellectual elite, and their readers conceptualized and interpreted the tale of the forty-seven *rōnin*.

---